9. しつけ方教室

譲渡後の動物を対象にした「しつけ方教室」では、人と動物が互いに快適に暮らすために役立つ内容を伝えるのが目的です。犬だけではなく、猫の飼い主を対象にした相談会も有効です。新たな飼い主にとっては気軽に飼育相談でき、行政サイドから見ればきちんと適正飼養がなされているかどうかの確認および指導ができる機会でもあります。

なぜ「しつけ方教室」を行うのか～目的の再確認～

行政が譲渡後の動物を対象に行う「しつけ方教室」は、民間の「ドッグスクール」や「しつけ方教室」とは開催の趣旨に違いがあります。「服従訓練」や「トレーニング」を教えるのではなく、あくまでも以下の３つの目的のために行うのだということを、まずスタッフ間で意識統一を図りましょう。

①愛護精神の向上

②適正飼養の確認・普及

③苦情の予防

譲渡された動物が健康であるか、愛情を持って育てられているか、飼い主を信頼し安心して家族の一員として暮らしているか、不妊去勢手術が済んでいるか、近隣に迷惑をかけることなくマナーを守って適切に飼育されているか……これらを確認し、必要に応じてアドバイス指導をするのが、譲渡動物に対しての「しつけ方教室」開催の趣旨です。
この「目的」を意識することによって、教室で何を教え、何を伝えるべきかが見えてきます。

最低一回は参加の義務を……

上記の目的のためには、少なくても譲渡後のしつけ方教室に一度は参加することを譲渡の条件とするのが有効でしょう。さまざまな事情でそれが不可能な場合にも、アフターフォローとしての「追跡調査～特に不妊去勢手術の実施確認」「電話などによる飼育相談の受け付け」「里帰り運動会など譲渡動物を対象にしたイベントの開催」などを通して、上記の目的を果たす必要があります。

「しつけ方教室」のキーワードは『安全』

犬猫のしつけや問題行動対処にはさまざまな方法がありますが、行政が行う「しつけ指導」や「問題行動への対処アドバイス」においては**人と動物双方が安全な方法**を基本と考えましょう。
人と動物双方が安全な方法とは、まず「罰をメインとしない」方法です。たとえば「大声で威圧する」「体罰を用いる」というような「罰を用いたトレーニング」は時として動物の虐待につながることもあり、愛護の精神を訴える行政であるなら避けるべきでしょう。また、しつけ方教室を見学する市民や子供たちの感情も考慮しましょう。威圧され、罰を与えられ、オドオドと命令に従う動物を見て何を感じるでしょうか。
飼い主も動物もストレスなく安全に楽しくできる……そんな「しつけ方」こそ、家庭動物には求められるものであり、現在、環境省の「適正飼養講習会」でも「正の強化をメインにしたしつけ」が推奨されています。

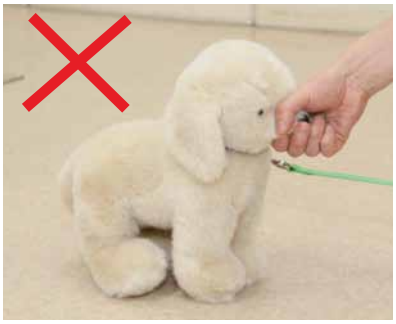
■ 「正の強化をメインにしたしつけ」とは？

動物の好ましい行動（人が望む行動）をほめて強化する（その行動がさらに強く多く出るようにする）方法です。
好ましくない行動（失敗）はなるべく起きないように予防し、よい行動に導く……
これは「子供でもお年寄りでも体力のない女性でも、しつけのプロでなくても誰でも行える」方法で**人と動物双方にとって安全な方法**です。

COLUMN 8

おすすめできない『叱り方』

適切な叱り方をすれば、してほしくない行動を止めることはできるでしょう。ただし、適切な叱り方というのは非常に難しい（現行犯で、してはいけない動作の遅くても２秒以内に、必要かつ十分な強さで行わなければ意味がない）ものですし、「何をすればいいのか」こちらが望む行動は叱るだけでは教えられえません。
そして、不適切な叱り方をしていると、こちらが考えもしないような副作用が起きます。
特に、以下の叱り方は、飼い主との信頼関係を崩し、かえって人への攻撃行動につながることもありますからおすすめできません。



鼻先を犬が降参するまで握る
（マズルコントロール）

犬が暴れなくなるまで仰向けに押え込む
（アルファロール）

参考資料

アメリカ獣医行動学会（ＡＶＳＡＢ）が発表している「動物の行動修正に罰を使うことに関する声明」からの簡略抜粋

罰を用いることで
- 不適切な行動が増強される場合がある
- 不十分な強度による罰に動物は慣れるため飼い主は段階的に罰の強度を強めることがあり、それは最終的に動物を深く傷つける結果となる
- 罰が強い強度で与えられると動物の身体に障害が生じることがある。たとえばチョークチェーンを用いた場合には、気管の損害やホルネル症候群（神経線維障害）、短頭犬種での致死性、肺水腫、眼圧の高い犬における緑内障の悪化などの可能性がある
- 罰刺激から逃避しようとして動物が攻撃的になる可能性がある。特に攻撃経験のある犬では攻撃の増加が強くそれが人間に向かう可能性が高い
- 罰によって好ましい行動（人が望む行動）を教えることはできない

よってＡＶＳＡＢは
- **動物の行動問題に対処する最初の選択肢として簡単に罰（チョークチェーンやピンチカラー、電気ショックカラーの使用を含む）を使うべきではないと、声明する**

左　チョークチェーン
右　ピンチカラー

AVSAB（American Veterinary Society of Animal Behavior）
www.AVSABonline.org

AVSAB Position Statement
「The Use of Punishment for Behavior Modification in Animals」
http://www.avsabonline.org/avsabonline/images/stories/Position_Statements/Combined_Punishment_Statements.pdf

犬のしつけ方教室開催にあたって考えるポイント

一回限りか複数回の開催か、講師は誰が務めるか、さまざまなスタイルがあります。いま自分たちの施設で可能な範囲から考えてみましょう。

① 何を教えるか？

「しつけ方教室」というと「アイコンタクト・おすわり・ふせ・つけ」などが必要不可欠と思うかもしれませんが、本当にそうでしょうか？もちろんできるに越したことはありませんが、譲渡後の犬が家庭犬として幸せに適切に飼養されるには「ふせ」よりも「散歩の後の足をおとなしく拭かせること」のほうが大事ではないでしょうか。完璧な「つけ」を教えるよりも、エネルギーを発散させるためのボール遊びの方法を教えたほうが、実生活で役に立つのではないでしょうか。地域の実情を知り、飼い主のニーズを知り、適正飼養に直結する内容、近所からの苦情を予防できるような内容を考えましょう。

■　飼い主は何を求めてくるのか？

一般に飼い主は「困っていることがその場で解決する」というような「結果」を求めてきます。しかし、たった一回のしつけ方教室で問題が解決することはまずないでしょう。一方教える側は「もっと熱心にしつけをして欲しい」と思いますが、飼い主皆が熱心なトレーニングマニアではなく歯がゆい思いをすることも多くあるでしょう。つまり、それぞれの過剰な期待を調整する必要があります。
行政が主催する譲渡後のしつけ方教室でできる範囲はどこかをみきわめ、それ以上の飼い主の要望（問題行動の解決など）には、専門家や民間の教室を紹介してもいいでしょう。

■　よくある質問について

飼い主から寄せられる「困ったこと」の相談は、ほとんどがよく似ています。
子犬の場合は、甘噛み、トイレ、いたずら……
成犬の場合は、散歩時の引っ張り、飛びつき、吠え……
こうしたよくある質問について答えられるように勉強して、準備しておきましょう。要点をまとめたプリントを用意して渡すのもいいでしょう。

② 開催回数について

一度に伝えられる内容には限りがあるので、複数回の開催が理想です。しかし、行政側の事情（人手不足や開催場所の都合など）、参加者の事情（複数回の参加は難しいなど）もあるでしょう。最初からハードルを高くしすぎて結局続かない、参加してもらえないという状態になるよりは、まず一回の開催から始めてみるのも大事な一歩です。
なお、複数回の場合、一回目は犬を連れずに飼い主だけに参加してもらう「オリエンテーション」としましょう。犬のしつけ方の基本的な考えや、家の中での問題（トイレがうまくできないなど）についての対処法、また次回から犬を連れて参加するときの注意や持ち物の案内などを盛り込みます。実際に犬を連れていると、犬に集中して講師の話を聞けない人も多いのです。まずは飼い主だけに説明し理解してもらうとその後がやりやすくなります。

③ 開催時期について

譲渡後いつ開催するかについては、各施設の譲渡の流れによります。

- **定期的な譲渡会で子犬を譲渡**
  子犬の成長は早いこと、飼い主の悩みも多いことなどから、譲渡後早めの複数回の開催が理想でしょう。譲渡会の際に告知し、参加を予定してもらいましょう。
- **定期的な譲渡会で成犬を譲渡**
  譲渡後 1 カ月程度たつと犬も新しい環境に慣れ、逆にさまざまな個性や悩みも出てきます
  譲渡会の際に、1 カ月後の開催を告知し、飼い主に予定を入れておいてもらいましょう。
- **希望者に適した犬を随時紹介・譲渡**
  月に一度、あるいは隔週で一度の「しつけ方教室」の開催を定例化し、新しい飼い主の都合に合わせて参加してもらうよう案内しましょう（参加の義務を伝え、譲渡の際に予定を決めてもらいましょう）。このスタイルの場合も、成犬向けと子犬向けは分けて開催したほうがいいでしょう（子犬には子犬特有の問題や必要なしつけがあります）。

④ 開催場所について

室内、屋外、いずれにしても、安全に開催できる場所を選びます。安全管理については次ページをご覧ください。

⑤ 講師について

職員が講師を行う場合と、外部のインストラクター、トレーナーに協力を求める場合があります。

- **外部に依頼する場合**
  まる投げではなく、行政サイドから教室開催の目的をしっかり伝え、しつけの方法や教える内容を確認しておきましょう。特に「罰をメインにしていないか」「事故につながる道具の使用を勧めていないか」チェックする必要があります。依頼する前にどんな指導法をとっているか、譲渡事業や譲渡される動物について理解があるか確かめておく必要もあるかもしれません。
- **職員が行う場合**
  まず犬の行動やしつけについての勉強が必要です。その上で自分たちにできる範囲を考え、カリキュラムを考えましょう。カリキュラム作成に当たっては「しつけ方教室の目的を再確認する」「その目的のためにどんなことを教えたいか考える」「教室の開催条件を確認（場所、回数、参加頭数、時間、アシスタントはいるか）」という要素を考えましょう。

しつけ方教室を安全に開催するために

教室を開催するにあたって、まず事故を起こさないように、安全に配慮しましょう。

① 駐車場で……逃亡注意！

車から降りるとき、乗せるとき、きちんと首輪とリードが付いているか確認してからドアを開けるように指導しましょう。なお、首輪が緩すぎて首から抜けそうだったり、リードの金具がうまくはまっていなかったりということも多くみられます。教室に入る前に講師が一頭一頭確認しましょう。首輪は指が一本入るくらいのきつさが目安です。

② 室内の教室なら……犬同士の接触トラブルに注意！

天気に左右されず、逃亡の心配も少ないですが、スペースが狭く犬同士の間隔をあまり取れないところも多いようです。他の犬が苦手な犬がいる場合は、端のほうに案内する、スタッフが犬と犬の間に入る、衝立などを利用するなど工夫をしましょう。

③ 子供の参加者に注意！

家族で参加してもらうのは歓迎ですが、小さいお子さんはご家族でケアしてもらうようにしましょう。勝手に他の犬に触ったり、教室を走り回ったり、大声をたてたりするお子さんがいると、怖がりな犬は不安から吠えたり、奥に隠れて出てこなかったり、また恐怖のあまり手を出してきたお子さんにうなる・噛むなどの行動が出る場合もあります。お子さんは親が確実にコントロールしてくれるように指導しましょう。

④ 屋外での教室なら……逃亡注意！

屋外の場合は、広さも十分あり、犬と犬の間隔も広く取れることが多く、犬同士の接触によるトラブルを避けることができます。ただし逃亡注意。センターの敷地内など、フェンスで囲われた場所が望ましいでしょう。飼い主にはリードを絶対に放さないように注意しましょう。また子犬の場合、ワクチンプログラムがすべて済むまでは屋外での教室には参加できません。

⑤ シーズン中のメス犬は参加不可！

シーズン中のメスがいると、オスはそのにおいに反応し興奮したりオス同士の争いになったりすることもあります。
シーズン中のメスは教室への参加を断りましょう。
（もちろん早期の不妊去勢手術を勧めましょう）

⑥ 教室の床に注意！

リノリウムなど滑る床は、犬の足にやさしくありません。滑る床面で走ったり興奮したりすると、関節を痛めたり、腰を痛めたりする原因になります。タイルカーペットを敷くなど工夫をしましょう。

子犬向けのしつけ方教室

■　ポイント

生後４カ月齢くらいまでの子犬向けの教室は、社会化をメインにプログラムをたてましょう。
社会化とは、人やほかの動物、環境や音など、これから出会うであろうさまざまな刺激に対してうまく慣らしていくことです。生後３週から１６週の「社会化期」と呼ばれる時期の子犬はさまざまなものを受け入れやすく、この時期に適切な社会化をしておくと将来飼いやすい犬になります。
また、この時期の子犬特有の問題（排泄、甘噛みなど）に対応した内容も盛り込みましょう。
社会化と、子犬特有の問題への対処が、「おすわり」や「ふせ」よりもずっと大事なことなのです。

■　注　意

ワクチンプログラムが終了していない子犬がいる場合は、室内での開催が必須です。屋外でしか開催できない場合は、ワクチンがすべて終了した後に開催しましょう。

■　飼い主に準備してきてもらうこと

- 子犬がいつも食べているフードを持って来てもらう
- 子犬には首輪とリードをつけて来てもらう
- なるべく家族で来てもらう

■　準　備

室内トイレスペースを必ず用意しましょう。設置の仕方、連れていくタイミングなどを実体験から参加者に学んでもらえます。また、適切なおもちゃやフードを用意し、飼い主に紹介するのもいいでしょう。

子犬のプログラム例

1 フードを食べさせてみる

場所や環境にあまりにストレスがかかりすぎていると、フードを食べることができません。食べられるということは子犬が新しい事を学べる状態にあるということ。少しずつ楽しく教えていきましょう。

2 人に対する社会化

他人に良い印象を持つように、相手からフードをもらってみましょう。フードを与える人は子犬を怖がらせないように「急に近付かない」「大きな声を出さない」「横から近づく」優しく接してください。

3 ものに対する社会化

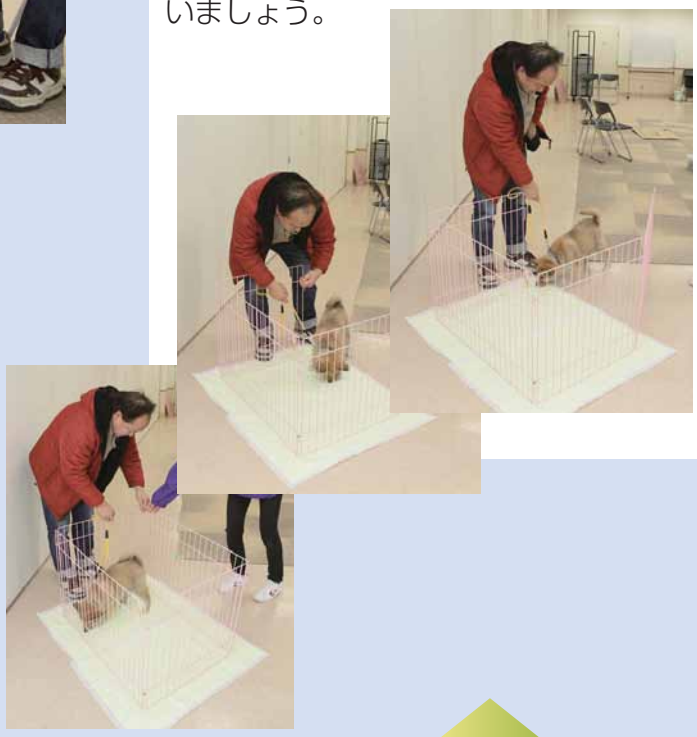
子犬にとって人間社会には不思議なものがたくさんあります。日常生活によくあるものに慣らしましょう。無理やり近づけるのではなく、フードで誘導しながら、子犬が自分から近づいていけるように優しく誘導しましょう。

4 犬同士の社会化

教室の仲間にご挨拶。子犬たちの様子を見ながら組み合わせを考え、会わせます。ひどく怖がる、隠れようとするなどの様子が見えたら無理をさせずにしばらくは抱っこで見学させましょう。その上で少しずつ慣らしましょう。

5 トイレに連れていってみましょう

子犬は少し動くと排泄したくなります。ある程度動きのあるプログラムの後はトイレに連れて行きましょう。そこでできたら、ほめてフードのごほうび。タイミングをとらえてトイレに連れていき、成功させることを経験してもらいましょう。



6 落ち着かせる練習（あおむけだっこ）

エネルギーを発散した後は、優しく子犬を抱き、飼い主が優しいタッチで落ち着かせましょう。
バタバタ暴れたときに床におろしてしまうと、暴れたら自由にしてもらえると学んでしまうので注意！
飼い主の腕の中なら安心して身をゆだねる……そんな犬にしていきましょう。

7 体のあちこちを触る練習

優しく声をかけながら、体全身を触ってみましょう。足先、口元など、先端部分は敏感なところ。抵抗のある子にはフードを使いながら慣らしていきましょう。どこでも触れる犬にしておけば、健康チェックも、獣医さんに行ったときも安心です。

8 お悩み対策

お悩み対策 ①甘噛み予防（遊び方の指導）

間違えて手を噛まないような大きさ、ひもの付いたおもちゃで遊びましょう。

お悩み対策

②吠えの予防（インターフォンの音）

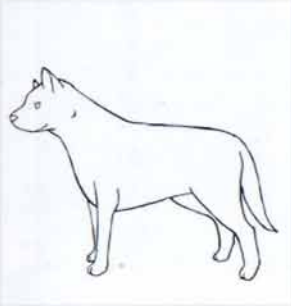
インターフォンに反応して吠えるようになる前に、音がしたらフード、音がしたらフード、という練習を繰り返しておきましょう。インターフォンが鳴ったら吠えるのではなく、飼い主が美味しいものをくれる合図と教えるのです。

※楽しさの演出
しつけを楽しんで行ってもらえるように、教室のプログラムにもゲームを取り入れたり、季節に合わせた工夫（ハロウインやクリスマスの絵を飾るなど）をすると、飼い主のモチベーションも上がります。

犬のボディランゲージ

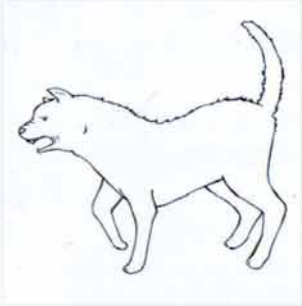
犬を扱う際には、常に犬の様子を観察し、ボディランゲージを読み取ることが大事です。
ボディランゲージとは、犬同士がコミュニケーションを取るための手段で、体の各部分の微妙な動きや、体の姿勢、相手との距離の取り方、動き方などで気分や意図を表現します。いわば、犬にとっての「ことば」。以下のイラストは、犬の代表的なボディランゲージです。適性評価を行う際、しつけ方教室を行う際には、こうしたボディランゲージに注目してください。

1 リラックス



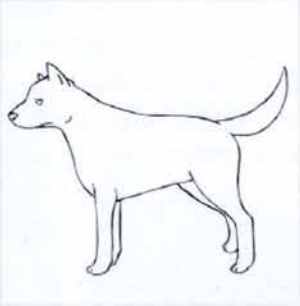
全身に力が入っていない／口元は緩んでいる／尾は自然な状態で下がっている／立ち耳の犬の耳は前に傾かず立っている

2 攻撃



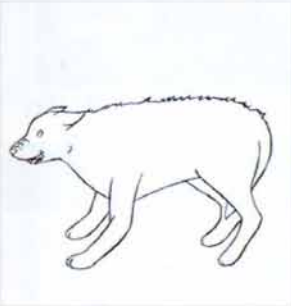
体を前に傾ける／背中の毛が逆立つ／耳を前に倒す／鼻の上にシワを寄せる／唇をめくりあげ、歯を見せる／尾を立てる

3 警戒



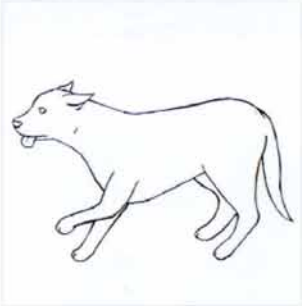
前のめりに立つ／背中の毛が逆立つ

4 防御



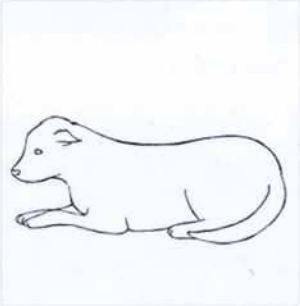
耳を後ろに倒す／瞳孔が広がる／鼻の上に皺を寄せる／口角が広がる／背中の毛が逆立つ／姿勢を低くする／尾を足の内側に巻き込む

5 服従（能動的）



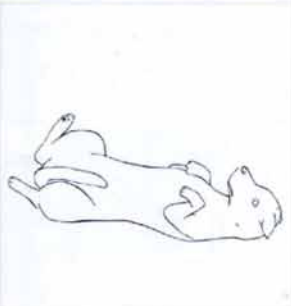
耳を後ろに倒す／舌をペロペロだす／口角が下がる／姿勢を低くする／尾を下げる／なだめるような行動をとる

6 服従（受動的）



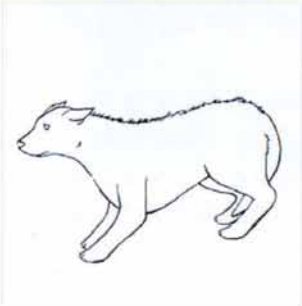
体を低く、小さくする／相手からのアプローチを避ける／不安で自信がない様子

7 服従（受動的）



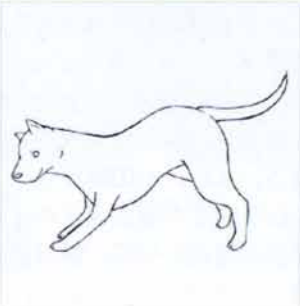
おなかを見せる／耳を後ろに倒す／視線をはずす／尾を足の内側に巻きこむ

8 「攻撃」か「逃走」かで迷っている



尾をさげるか、足の内側に巻き込む／体を低くする／背中の毛が逆立つ

9 遊びに誘う

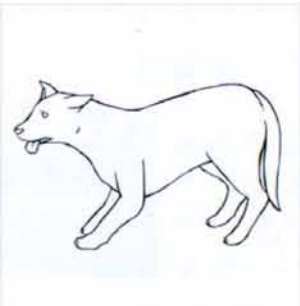


体を低くする／前足を伸ばす／尾を大きく振る

10 甘えている

体をくねらせる／尾を振る／体をすりよせる／口の周りをなめる

11 緊張・ストレス



体を低くする／尾を下げる／息使いが荒くなる／人や動物だけでなく、環境にストレスを感じることもある

成犬向けのしつけ方教室

■　ポイント

成犬向けの教室は、とにかく「安全」に開催することを心がけましょう。
さまざまな個性を持った犬と飼い主さんが集まります。事故やケガが起きないようにするのはもちろん、犬によくない経験（犬同士のけんかなど）をさせないようにしましょう。
プログラムは、単なる服従訓練ではなく、現実の生活に即したものにしましょう。
飼い主の悩み（引っ張りや飛びつきなど）に対して、難しいトレーニングでの解決法ではなく、安全で使いやすい道具の紹介をしたり、管理（マネージメント）をして問題を予防する方法を指導しましょう。

■　飼い主に準備してきてもらうこと

- **犬がいつも食べているフードや美味しいおやつを持って来てもらう**
- **犬には首輪とリードをつけて来てもらう**
- **なるべく家族で来てもらう**
- **排泄物を片付け持ち帰れる道具一式**

■　準　備

屋外でも、室内でも、安全に配慮した準備をしましょう。
また適切な道具やおもちゃを用意し、飼い主に紹介するのもいいでしょう。

■　注　意

成犬のクラスでは、安全のために、犬同士の距離を保つことが重要です。

注意！近づきすぎです！

間にイスを入れる

間にアシスタントが入る

成犬のプログラム例

1 リードの持ち方の注意

安全なリードの持ち方を覚えましょう。特に大型犬の飼い主には、両手でしっかりとリードを持つことを指導しましょう。

2 フードを食べさせてみる

場所や環境にあまりにストレスがかかりすぎていると、フードを食べることができません。ちゃんと食べられるか確認します。

3 アテンション（名前を呼ばれたら飼い主を注目する）練習

名前に一瞬でも反応して飼い主のほうを見たら、すぐにごほうび。何秒も何十秒も目を見つめ続けなくてかまいません。名前に対する飼い主への反応をよくしておくと、どんな場面でも役に立ちます。

4 うんち拾いゲーム

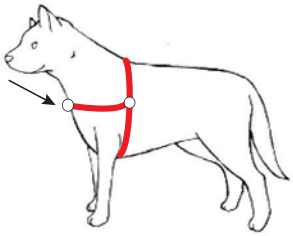
まずオスワリができるか確認。そのままの姿勢でごほうびを食べさせ続けている間に、ビニール袋でうんちを拾うマネをしてもらいます。日常生活に役立つよう工夫された「おすわりまって」の練習です。いくつ拾えたか、ゲーム感覚でカウントしましょう！

5 お悩み対策

お悩み対策 ①お散歩（引っ張って困る）

引っ張りの強い犬には、引っ張り防止ハーネス（イージーウォークハーネス、センシブルハーネス）を勧めましょう。実際に着けて歩いてみると、その効果を実感できます。

※このハーネスは、引っ張る犬を胸の部分で止めるという構造です。一般の首輪よりもずっと弱い力で止めることができます。引っ張らずに歩けているときは、ほめることを忘れずに。



リードは前胸のリング（矢印）に着けます。

お悩み対策 ②飛びつき

人が近づき飛びついたら、すぐに立ち去ってもらいます。
落ち着いていられたら、なでたり、ごほうびを与えほめます。
どちらが得か、犬自身に考えさせる練習です。

お悩み対策 ③いたずら

退屈対策に、いたずら防止に、噛んでよい物を与えましょう。
実際におもちゃの中にフードを詰める様子を見せてじらしてから与える、などのポイントも伝えましょう。

お悩み対策 ④エネルギー発散（遊び方の指導）

引っ張りっこ、ボール遊びなどの遊び方のポイントも指導しましょう。
遊びの中に、オンオフのコントロール（犬が落ち着くまではおもちゃを与えない、など）を入れていく方法もあります。

How to

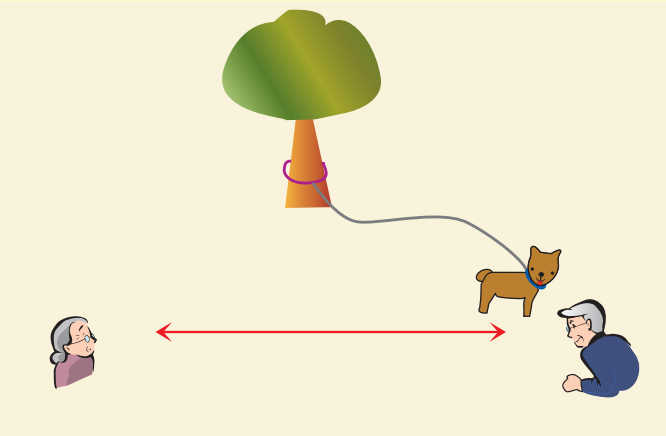
犬のエネルギー発散の方法

しっかりエネルギーを発散させないと問題行動につながる、とは言っても、実際にどのように犬のエネルギーを発散させたらいいか、分からない飼い主もいます。以下のような具体的なアドバイスもしてみましょう。

庭などフェンスに囲われ犬を放すことができる場所か、室内で……

■引っ張りっこ遊び

犬は引っ張りっこ遊びが大好きです。だんだん興奮してくると「ウーッ」といううなり声を出しますが、これは危険な合図ではなく「盛り上がって楽しい！イエイ！」というような意味です。
勢い余って手まで噛まないように、長いロープのようなおもちゃを使いましょう。



■ボール遊び

レトリバー系の犬にはたまらない遊びです。ボールを口から離さないというような場合は、同じボールを二つ用意しましょう。交互に投げることで、一つのボールに執着せずに投げてもらった方を追いかけます。

■飼い主の体力がない、犬をノーリードにして放す場所がないなら……

支柱になるもの（しっかりした柱や、大きな木の幹など）に、長くしっかりしたひも（市販のロングリードや、普通のリードを複数つなげたもの、長いロープなど）を結び付けます。ひもの伸びる最も遠い場所に一人、逆方向に一人が立ち、犬を呼び合います。犬が走ってきたら美味しいおやつを与え、またすぐに逆側の人が呼びます。走ってきたら美味しいおやつ。これを繰り返すと、10 メートルのロングリードなら 20 メートル間を犬が走り回って運動できます。体力がない高齢の方にもお勧めです。

■運動量の目安

必要な散歩時間や運動時間は、犬種やサイズ個体差もあり、一概には言えませんが、たとえば散歩から帰って水を飲みすぐに横になるようなら満足しているということでしょう。散歩から帰宅しても飛び付いてきたり、走り回ったり、ちょっと寝ただけですぐ起きて遊ぼうとするようなら、エネルギーの発散が十分ではないのかもしれません。散歩には限りませんが、2 歳未満の若くて健康な犬には、一日に一回肩で息をし、ハアハアとあえぐぐらいの運動を提供してやりたいものです。それだけで問題行動（吠える、いたずらする、家の中で大運動会になるなど）が軽減することもあります。

TOPICS

犬も、飼い主も、ほめて楽しく
～しつけ方教室でのコミュニケーションスキル～

犬と一緒に「しつけ方教室」にやってくる飼い主は、自分の犬のことでいっぱいいっぱいで、講師の話が聞けなかったり、周りの状況が見えなかったりします。習ったことをすぐにうまくできないのも当たり前のことです。そうした参加者に対して、少しでも楽しく前向きに参加してもらうために、以下のような点に配慮して指導しましょう。

楽しい雰囲気を演出！

犬を連れていると、いつも以上に人は緊張します。それをほぐすのは講師やスタッフの笑顔。人も犬もリラックスした楽しい状態でないと学習能力が半減すると言われます。明るい挨拶や親切な対応、優しい笑顔で、楽しい雰囲気を作りましょう。

頭ごなしに否定したり、批判したりしない！

「そのやり方は間違っています」などといきなり言われたら、コミュニケーションの扉は閉じられてしまいます。改善を促す時は、少しでもいいところを見つけてまずほめてから、「さらによくするには……」というアプローチで指導しましょう。少しでも改善されたら、すかさずほめましょう。

例：「犬を上手にほめていてとてもいいですね、次はもう少しリードを短く持ってやってみましょうか。そうです、とてもよくなりましたね」

それぞれの人に合わせた指導を！

人によって、頭で理解しないと体が動かないタイプの人、まず体で覚えるタイプの人など、いろいろです。年齢や性別の違いもあるでしょう。相手に合った指導を工夫しましょう。

日常生活に結び付けた指導を！

これから行う練習が日常生活で何の役に立つのか、必要性について説明しましょう。やみくもに「これがしつけです」では説得力がなく、練習しようというモチベーションが上がりません。

例：「散歩でうんちを拾うときに、犬がおすわりで待っていてくれたらいいと思いませんか。拾うのも楽だし、周りからも賢い犬だって思われますよ。だから今から『おすわりまって』を練習してみましょう」

よくできているときは、ほめる！

犬が上手にできているときはもちろん、飼い主さんがうまく犬を扱っているときは、声に出してほめましょう。犬も人もほめられると、やる気になります。

休憩を挟んで、無理のないプログラムを！

教えたいことがたくさんあっても、1時間の教室に内容を詰め込みすぎノンストップで行っても、人の記憶に残るのはわずかです。また、犬の集中力も長くは続きません。同じ練習ばかりしているとすぐに飽きて、他の犬が気になったり吠えたりすることもあります。ゲーム形式を取り入れる、途中で休憩を入れるなど、人も犬も飽きさせないプログラムを考えましょう。

猫の飼い主向けの相談会

譲渡後に猫を連れて集まることは実際とても困難ですが、飼い主に集まってもらってさまざまな悩み相談に乗ったり、飼い主同士お互いに情報交換をしたりすることで、適正飼養を勧めていくことができます。「しつけ方教室」ではなく「猫の飼い方相談会」というイメージです。猫の飼い主は、犬の飼い主と違って比較的孤立しているものですが、こうした機会を通じてネットワークを作ることで、地域の猫問題解決のサポーターを育てることにもつながります。ぜひ一度開催してみてください。

開催のポイント

① 定期的に開催

月に一度あるいは２カ月に一度程度予定し、参加しやすいときに参加してもらいましょう。
譲渡後一度は参加してもらうよう案内します。

② 楽しく親しみやすい雰囲気作り

堅苦しい勉強会ではなく、お茶などを用意した「茶話会」として案内すると、猫の飼い主も参加しやすいでしょう。

③ 相談には親身に対応

実際に飼い始めてからの悩みや疑問に適切に答えられるよう、猫の行動学や飼育方法など勉強しておきましょう。また、参加者同士「うちはこうしてうまくいった」というアドバイスをもらうのもいいでしょう。よくある質問には解決のヒントをまとめたプリントを用意しておきます。

④ 不妊去勢手術実施の確認

子猫の殺処分数を考えても、不妊去勢手術の徹底が急務です。譲渡後の手術実施を確認し、まだの場合には具体的な不妊去勢手術のメリットを再度説明し、近くの獣医師を紹介する、日程を予定させるなど積極的に働きかけましょう。

COLUMN 9

松本市「猫のにゃんでも相談会」

長野県松本市では、松本保健所と長野県動物愛護会「ネコ部会」の共催で、月に一度、松本保健所の会議室で「猫のにゃんでも相談会」を開催しています。ここには、猫の飼い主（一般の飼い主はもちろん、譲渡猫の飼い主も）、また猫の問題で困っている人たちがさまざまな相談を持ち込みます。猫の飼い方から、猫に関する苦情まで多岐にわたる相談に答えるのは、保健所のスタッフ、愛護会のメンバー、そして協力してくれる地元の開業獣医師。さまざまな問題への対処方法を、専門家の立場、市民の立場で共に考えようという相談会になっています。

猫に関しては、現在どこの自治体でも問題が山積みです。譲渡事業だけを熱心に行っても解決にならず、これといった策もなく困っている自治体も多いと思いますが、この相談会のように、猫問題を多角的にとらえ、多くの人を巻き込み、適正な飼い方、そして地域で人と猫が共生できる社会を作っていこうという試みは参考になります。
譲渡後の相談会という枠にとらわれず考えてみてください。

猫のエネルギー発散と適切な道具

猫は本来捕食性が強く、動くものに敏感に反応します。
その本能が十分に満たされないと、室内飼いの場合、飼い主の体に爪や歯を立てたり、過剰に部屋の中で走り回ったり、夜中に騒ぐなどの問題が発生しやすくなるのです。
そこで必要なのが飼い主さんとの適切な遊びです。猫と毎日しっかり遊んであげることで、捕食行動が適切に満たされるだけでなく、飼い主さんとの絆も深まり、よいコミュニケーションを取る時間にもなります。
以下に挙げたおもちゃでの遊びを、ぜひ飼い主に勧めてください。なお、猫と遊ぶ際に忘れてはならないルールが一つあります。それは人間の体をおもちゃにして遊ばせないこと。手や足で猫をじゃらすことを習慣にしてしまうと、猫は人の体を遊び道具だと思い、かなりひどいケガをすることがありますので注意してください。

一緒に遊ぶおもちゃ

飼い主さんが手に持ち動かすことで、猫に全身運動をさせることができます。
コツは「取れそうで取れない」ように動かすこと。そして時々猫にくわえさせたり、爪に食い込ませてやりましょう。
おもちゃを家具の上から床まで動かし猫に追わせると、上下運動にもなります。上手におもちゃを動かして、猫を疲れさせましょう。

吊るすことのできるおもちゃ

市販のおもちゃにひもや洋服に使用するゴムなどをくくり付け、ドアノブやフック、イスの背もたれにしばっておきます。留守がちな方は、こういったおもちゃを複数用意してから出かけるようにすると、猫が勝手に遊んでいてくれるでしょう。飽きさせないコツは、おもちゃを吊るす場所を毎日変えること、吊るすおもちゃをローテーションで取り替えて変化をつけることです。猫によってはひもを体に巻き付けてしまう子もいるので、まずはどんな遊び方をするのか飼い主さんが見ていられる時に試してから留守中に使用してください。

フードを入れることができるおもちゃ

肥満傾向にある猫や食欲が旺盛ですぐに催促する猫におすすめなのは、透明で中にフードを詰めることができるタイプのおもちゃです。おもちゃには穴が開いていて、猫が前足や体を使って転がすと、穴からフードが少量ずつ出てくるしくみです。まずは少量フードを入れて猫がおもちゃを転がすのを手伝いながら遊び方を教えてあげましょう。
慣れてくれば食事を全てこの中に入れても大丈夫。取り出して食べるためにはかなり体を動かすことになります。
また、このおもちゃは空になったペットボトルで簡単に作ることができます。カッターでペットボトルに穴を開け、猫がケガをしないようにガムテープやビニールテープで切り口をガードしましょう。
ペットボトルのどこにどんなサイズの穴を開けるかで、フードの取り出しやすさを調整することができます。
留守がちな家庭で飼われている猫にも良いおもちゃになるでしょう。

一人遊び用おもちゃ

猫用のおもちゃとして今は多くのおもちゃが市販されています。まずはいくつか購入してその猫の好みを探ってみましょう。もし猫がおもちゃをすぐに壊してしまったり、噛みちぎって飲み込んでしまうことがあれば、そのおもちゃは留守中に与えるのは避けましょう。誤飲を防ぐためです。
飽きさせないコツは、同じものをずっと与えっぱなしにしないこと。定期的に新しいものと取り替えローテーションを組み適切な刺激を与えましょう。

猫の飼い方アドバイス

■猫がトイレを失敗するときは？

猫の飼い方で最も相談が多いのが「トイレ」に関することです。
トイレでしてくれない、急にトイレを使わなくなった……というような悩みに対しては、次のようなポイントを押さえて、アドバイスしましょう。

1 健康を害していないでしょうか？

猫がトイレを急に失敗するようになったときには、まず体調を崩していないか考えましょう。
猫は他の動物に比べ泌尿器系の病気にかかりやすく、体調の悪化が原因でトイレを失敗しているのかもしれません。かかりつけの獣医師に相談してみてください。

2 トイレの設置場所はどこですか？

家の中で猫がいつもいるところに近く、猫が行きやすい場所に設置しましょう。
リビングルームにいることが多い猫なら、その部屋の片隅がいいでしょう。
よくないのは、床面がガタガタと安定しない場所、洗濯機の横など大きな音や振動がある場所、ドアのすぐ近くの場所（急にドアが開くとびっくりする）、寒くて遠い場所（普段はリビングにいる猫のトイレが廊下の奥の洗面所だと、遠さや寒さが億劫になってトイレに行かなくなります）などです。

3 トイレの砂はどんなものを使っていますか？

いままで問題なく排泄していたのに、急にトイレを使わなくなったというようなときは、トイレの砂に問題があることも多いようです。
特売で安かったから、と急にトイレ砂を変えると、猫は使わなくなる場合があります。
それぞれの猫に好みもありますが、一般に「荒い砂＝粒が大きい砂」よりも「細かい砂＝粒が小さい砂」が好まれます。
猫は排泄をする際に、しっかり足を踏ん張ります。あまりに荒く、足が安定しないような砂だと、そこでしなくなります。排泄しづらいわけです。
また、排泄の前後、砂を掘って排泄物を埋めたり隠したりするのが猫の習性です。
それができるように、トイレ砂は深くたっぷり入れてやりましょう。

4 トイレの数は足りていますか？

基本的に、猫のトイレは「頭数＋１」と考えてください。つまり猫が一頭でも、トイレは２つ、それぞれ離れた場所に置きましょう。猫の数が増えたら、それだけトイレの数も増やします。設置する場所も十分離します。猫同士の相性が悪い場合、強い猫がトイレのそばにいると、弱い猫は近づくことができません。

5 トイレ容器は十分な大きさで、使いやすいですか？

猫のサイズに対して、トイレが小さいとよくありません。
トイレの縁に猫がつかまって排泄をしていたり、体がはみ出しているようなら、それは小さすぎるということです。十分な大きさのトイレを用意しましょう。
猫トイレとして市販されているものだけではなく、プラスチックの衣装ケースに砂をたっぷり入れてトイレとするなど、工夫してみましょう。
また、カバーが付いているタイプのトイレは、砂が飛び散らないので人には便利ですが、中ににおいがこもりやすく、また排泄するたびに掃除をすることを人が億劫に感じてしまうので、猫にとっては、カバーなしのほうが快適でしょう。

もともと猫は囲われた場所で排泄をする動物ではありません。
また、容器を洗う洗剤を変えただけでも、その洗剤のにおいが原因でトイレを使わなくなる子もいます。気をつけましょう。

猫の動作で分かる「トイレの不快度」

～こんな動作が出たら、そのトイレは快適ではありません～

①猫がトイレの縁に立って排泄する（狭い）
②慌ててトイレから出てくる（汚いので、そこに居たくない）
③短時間しかトイレに入らず、あまり掘ったり埋めたりしない（掃除がされていない）
④トイレの後、足を振っている（足についた排泄物を振り払っている＝足に排泄物が付いてしまうくらい砂が浅い）

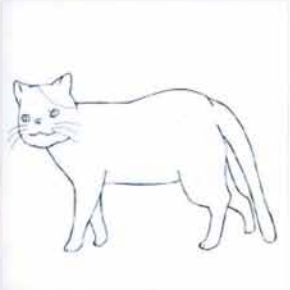
■猫にケージを使う場合の注意点

ケージに猫を長時間入れっぱなしにしないようにアドバイスしましょう。
猫は、ケージの中にいる間は活動的に動き回ることができません。すると、その反動で、ケージから部屋に出して自由にしたときに、非常に活動的になり、部屋中を暴れまわったり、飼い主に対してじゃれ噛みをしたり、引っかいたりしがちです。こうなると飼い主が手を焼き、結局またケージに戻してしまう。また出すと大騒ぎ、という悪循環につながります。
ケージを使う場合は、出し入れを頻繁にし、長時間猫を入れっぱなしにしないように伝えましょう。

猫のボディランゲージ

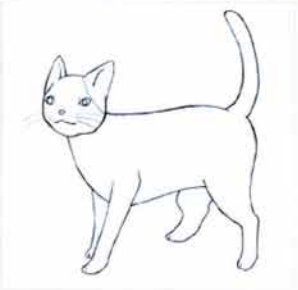
猫を扱う際には、常に猫の様子を観察し、ボディランゲージを読み取ることが大事です。
ボディランゲージとは、猫同士がコミュニケーションを取るための手段で、体の各部分の微妙な動きや、体の姿勢、相手との距離の取り方、動き方などで気分や意図を表現します。いわば、猫にとっての「ことば」。以下のイラストは、猫の代表的なボディランゲージです。適性評価を行う際、ケアを行う際には、こうしたボディランゲージに注目してください。

1 平常な状態



全身に力が入っていない／尾は自然な状態で下がっている

2 喜び



尾を高く上げる／喉を鳴らす／体を摺り寄せる／軽い甘噛みがある

3 恐怖

体を低く小さくする／体を後ろに引く／耳を倒す／瞳孔が開く

4 恐怖による威嚇

体が弓なりになる／尾がブラシ状になる／完全に耳を倒す／瞳孔が開く／口角を後ろに引く

5 攻撃（能動的）

体を大きく見せる／前のめりの姿勢になる／耳を前に倒す／低いうなり声／相手ににじり寄る

6 不快

尾を左右に振る／耳がびくびく動く

7 遊びに誘う

仰向けになる／全身に力が入っていない／突然甘噛みをする／じゃれる

8 遊びに誘う

尾をたてる／尾をくねらせる／前足でちょっかいをだす

表情の変化

1 リラックス

力が入っていない／瞳孔は閉じている／耳は自然な状態で前を向いている

2 不安・緊張・葛藤

耳がぴくぴく動く／口元がやや緊張する

3 恐怖による威嚇

耳が後ろに倒れる／瞳孔が開き始める／唸り声、威嚇音

4 恐怖による攻撃

耳が完全に倒れる／口角が後ろにひかれる／瞳孔が開く

FAQ（講習会などでよくある質問にお答えします）

Q3 子猫の場合は、健康状態がよく、特に大きな問題がなければそのまま譲渡していますが、何かテストを行ったほうがいいのでしょうか？成猫の場合はどうでしょうか？

A 猫の場合は、犬のように明確なテストを行うということがまず不可能です。猫の世話をするスタッフが、ケージに移すとき、日々のケアの際などに、どの程度人に慣れているか、攻撃性が見られるか、性質や癖、好みなどを記録し、評価し、その情報を譲渡希望者に伝え、マッチングの参考にしていくことが実際的でしょう。最も大事なのは、犬の場合と同様『安全』という基準。つまり人に対する著しい攻撃性がない、ということが最大の要件になります。特に猫は残念ながら収容頭数が多い現実が有ります。まずは扱いやすく攻撃性のない猫から譲渡候補に選んでいくことが必要です。

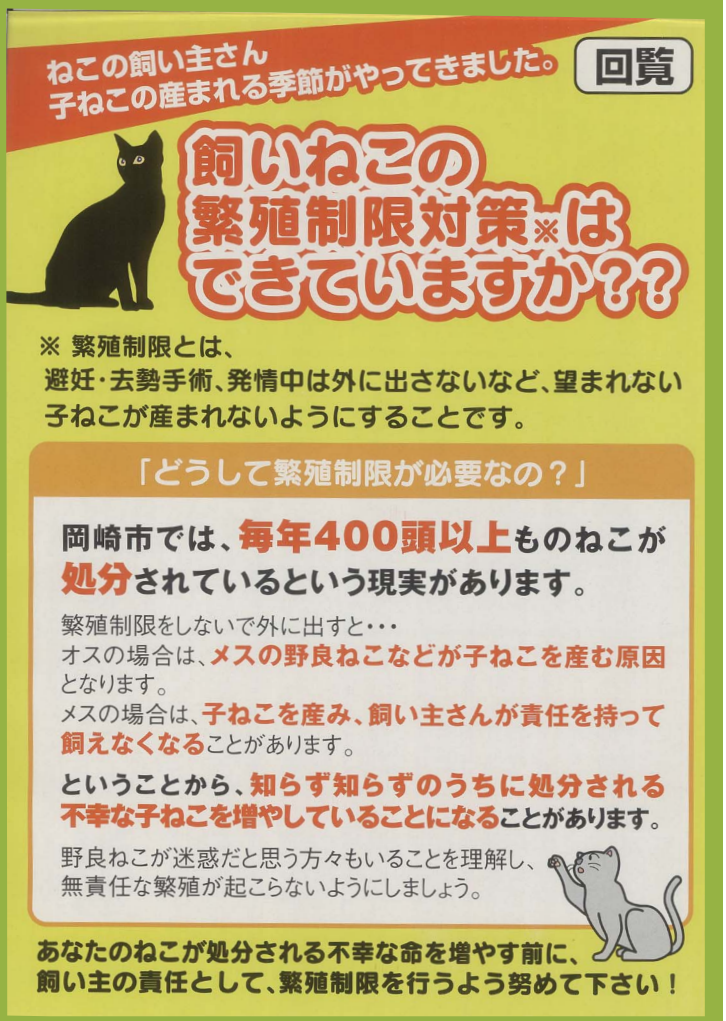
一つの目安として、「収容後長く経過していても」「誰に対しても」「いつでも」、以下のような行動を見せる猫は、譲渡が難しいでしょう。

・近づくと毛を逆立てる、またはまったく触らせない

・はっきりとした警告を出さずに急に攻撃することがある

・人が近づくだけで攻撃性を示す

※子猫の場合の性格チェックの方法は「子犬と子猫の適正ガイドブック」をご覧ください。

Q4 飼い猫の不妊去勢手術を勧めるいい方法はありませんか？

A 特に苦情が寄せられているわけでもない場合、猫を飼っている家庭に直接不妊去勢手術の方法を伝える機会はあまりありませんが、愛知県岡崎市動物愛護センター animo では、地域の回覧板をうまく使っています。猫の繁殖シーズンに合わせて制作し、岡崎市内全地域の町内会の「回覧板」に挟み込み、地域で回覧してもらうようにしています。回覧板は多くの家庭が目にする「地域のメディア」。それを有効に利用した事例です。